

一人ひとり ありのままの 輝きを認めて

新聞やテレビなどで取り上げられることも増えた「**L G B T Q**」。エルジービーティキュー言葉は知っていても「自分には関係ない」と思っていませんか。気づいていないだけで、あなたの友人が、同僚が、家族が、人知れず悩み、周囲の「ふつつ」に押しつぶされそうになっているかもしれません。今回の特集では「多様な性」について考えます。

問合せ 役場総務課自治振興係 ☎295-2112 内線314

日本人の約11人に一人

「恋愛・結婚は異性とするもの」、「性別の区別は男女だけ」という価値観が多数を占める社会では、その価値観にそぐわないLGBTQの人たちが、暮らしの様々な場面で生きにくさを感じています。

同性を好きなことで、からかわれる、女性の格好をしたから「男なのに」といじめられる。そして自分がおかしいと悩み、誰にも相談できずに追い詰められてしまう…。

拒否されたり、好奇や蔑みさげすの目で見られることを恐れて、自分がセクシュアル・マイノリティ（性的少数者）であることを隠して生きていくしかない人が多いのです。

電通ダイバーシティ・ラボが2020年12月に行った調査によると日本では11人に一人がセクシュアルマイノリティに該当すると回答しています。

「LGBTQ」という言葉は、レズビアン（L）、ゲイ（G）、バイセクシュアル（B）、トランスジェンダー（T）、クエスチョニング（Q）の頭

文字を並べた性的少数者の総称として使われますが、セクシュアリティは非常に多様で、自分を男性・女性のいずれかとは認識していない人（Xジェンダー）や恋愛感情

や性的欲求を抱かない人（アセクシュアル）もいます。また、これらの言葉は、それぞれの生き方を決めつけるものでも、象徴するものでもなく、こうした言葉でレッテルを張られることを不愉快に思う人も少なくありません。

それでは、なぜ、LGBTQという言葉が使われるかというと、LGBTQの人たちをめぐると社会的課題には共通点が多いことから、これらの課題を社会全体の課題として考え、解決に向かう道と一緒に探していきたいという思いから、多様な性について考える際に、LGBTQという言葉が使われているのです。

性のあり方は多様です

人の性は、「からだの性」、「こころの性」、「好きになる性」、「表現する性」の組み合わせです。これらは男女の2種類にはつきり分けられるも

性のグラデーション

性は4つの要素の組み合わせから考えることができます。そして、性のあり方は、その組み合わせによって多様であり、一人ひとり違います。つまり十人十色。このことから性のグラデーションと言われています。♥の位置がどこにあるのかは、人によって少しずつ変わるため、全ての人に関係ある概念として考えられています。

からだの性 —生物学的性—



生まれながらの身体の特徴で判断されます。

こころの性 —性自認—



自分が認識する性別のことです。からだの性と一致しない人、性別を決めたくないという人もいます。

好きになる性 —性的指向—



恋愛対象となる性別のことです。その対象は異性、同性、両性など様々で、性別にこだわらない人もいます。

表現する性 —性表現—



服装や言葉遣い、しぐさなど、自分をもどのように表現したいかという性です。

のではなく、多様に組み合わせられ、また揺らぎといった流動性もあることから、性はグラデーションと言われることもあります。とくに「こころの性」や「好きになる性」は性的な趣味や好みの問題ではなく、自分の意思で選択できるものではありません。

方一人ひとり違うのは当たり前のこと。「人と違うことは悪いことじゃない」、「そのままの自分でいい」…。性のあり方は人それぞれであり、全ての人に関係することです。多様な性について知り、一人ひとりのありのままの生き方を認めあえる社会にしていきたいです。

LGBTQってなに？ — What's LGBTQ? —

これらの枠組み
に当てはまらない
人もいます。

からだの性

—生物学的性—

こころの性

—性自認—

好きになる性

—性的指向—



L レズビアン	♡ ♡	×	♡	×	♡	=	女性同性愛者。女性として女性を好きになる人。
G ゲイ	♡ ♡	×	♡	×	♡	=	男性同性愛者。男性として男性を好きになる人。
B バイセクシュアル	♡ ♡	×	♡ ♡	×	♡	=	両性愛者。同性も異性も好きになる人。
T トランスジェンダー	♡ ♡	×	♡ ♡	×	♡ OR ? OR ♡ ♡ OR ? OR ♡	=	こころの性とからだの性が一致しない人。
Q クエスチョニング(※)	♡ ♡	×	?	×	♡ OR ? OR ♡	=	性のあり方を決められない、あるいは探している人。 性別を決めていない人。

※「クィア（Queer）」（LGBTに当てはまる、全ての性的マイノリティ）とも言われます。

誤解しないで！
LGBTQのこと

LGBTQという言葉を目にする機会は増えても、誤解や偏見、間違った考えを持っている人も少なくありません。多くの悩みや不安を抱えている人に寄り添い、一人ひとりの「生き方」を尊重しましょう。



本人の意思や趣味の問題ではないのですか？

性自認・性的指向はあらかじめ自分の意思で選べるものではなく、自分の意思でコントロールできるものではありません。また、国際疾病分類で性別への違和は「病気」や「障害」ではないとされています。



LGBTQの人はどうやって家族になるの？

同性婚は現在日本では認められていないため、「パートナーシップ宣誓制度」という制度が各地でスタートしはじめました。また、国は「同性でも男女のカップルでも子どもが安定した家庭でしっかり育つことが大事」と里親となることを認めています。

10月1日から

「毛呂山町パートナーシップ宣誓制度」
がスタートしました



一人ひとりがお互いに人権を尊重し、多様な生き方や価値観を認め合いながら、誰もが活躍できる地域社会を目指すため、令和3年10月1日から「毛呂山町パートナーシップ宣誓制度」を開始しました。

「毛呂山町パートナーシップ宣誓制度」とは、お互いを人生のパートナーとし、日常生活において、相互に協力し合うことを約束した一方または双方が性的マイノリティであるカップルが、パートナーシップ関係であることを町に宣誓する制度です。

制度による法的な効果はありませんが、お二人のパートナーシップを尊重し、性的マイノリティが抱える様々な困難や生きづらさが緩和され、性の多様性への理解の促進に繋がることが期待されます。



さいき ときえ
齋喜 逸江さん

1986年生まれ。福祉関係事業所で障害者の支援を行う傍ら、心の性と身体性の不一致な性別違和当事者として各地で講演活動を行っている。

性の多様性が当たり前に

認められる社会に…

「性的少数者が特別視されるのではなく、普通の一人の人として当たり前に認められる世の中になってほしい」と語る齋喜さんは、女性として生まれた身体と生き方が一致しないトランスジェンダー。現在は戸籍上も男性として生活をしている。

もともと人前に立つのは苦手であったが、当事者が発信していかないと性的少数者に対する偏見や誤解が無くならないという思いから各地で講演を行っている。

齋喜さんが自身の性に違

和感を覚え始めたのは、小学校高学年のころ。赤いランドセルが嫌で、当時、流行っていたキャラクターのシールをランドセルの背面いっぱい張り付け、先生から注意を受けながらも剥がせなかった。中学生になり身体が変化するにつれ、性に対する違和感が増す一方、女性としての身体を受け入れなきやという葛藤があったという。高校は女子高に進学したが、同級生の男子たちが、どんどん男性らしい身体に変化していく様子を目の当たりにしたくないという苦痛からの逃げだったと当時を振り返る。

社会人になり、誰にも相談できないままインターネットで性的少数者に関する情報を集め、都内の病院にカウンセリングに通うようになる。そこで性同一性障害という診断を受けたことで、仲の良い友達や両親にカウンセリングアウトすることを決意した。

男性、女性、性的少数者ではなく、

一人の人として見てほしい

友達にはSNSで思いを伝えたが、返信が来るまでの時間、「どんなふうに思われるんだろう」、「嫌われたらどうしよう」と不安でいっぱいだった。

しかし、返ってきたメッセージに「トキはトキで何も変わらないじゃん」と書かれた文面を読み、「私のことを一人の人として、見てくれるほど嬉しかったという。」

両親にカウンセリングアウトするときは、「親子の縁を切られるのでは」という不安もあったが、「自分の意志は何があっても変わらない。自分らしく生きさせてほしい」と強く伝えたという。

以前と比べて、LGBTQという言葉が浸透してきたものの、当事者は様々な場面ですんどさを抱えて生活している。

トイレや更衣室、髪型や制服、名前、就職活動、健康診断…。何にしんどさを感じるかは人それぞれではあるが、

話を聞いて寄り添ってあげるだけで力になれることがあるという。

また、小・中学生の多感な時期に、自分の性だったり、身体の変化に違和感を感じる子たちがいるのなら、そこはやはり、ゆっくり慎重に考えていく必要があるという。

「自分自身と向き合う時間をゆっくり取り、親御さんとじっくり話し合って、それでも私はこうしたいという結論が出たのなら、そのときに次のステップに進んでいくほうがいい」という。

そして、今、悩みを抱え、周囲に相談できる人がいなくて悩んでいる人がいるなら、「あなたは一人じゃないんだよ、ということ伝えたい」と齋喜さんは語る。

齋喜さんからのメッセージ

身近に性的マイノリティの人はいます。皆さん、出会ってはいませんが、自らカウンセリングアウトする人は、ほとんどいないと思います。

なぜなら、カウンセリングアウトしなくても、気づかれることはないし、嫌われたり言いふらされたりするかもしれないリスクを負ってまで、カウンセリングアウトしようとは思いません。環境が整っていないから、誰にも言わず生活している人が多いのが現状です。

少しでも多くの人が性的マイノリティに関する情報や知識を身に付けていれば、カウンセリングアウトしやすい環境づくりの第一歩に繋がると思います。

「関係ないからどうでもいいや」と思うのではなく、今の時代だからこそ、性的マイノリティについて学び、誰もが自分らしく生きていけるよう、協力してもらえたら嬉しいです。

私が勤める法人では、障害児から精神障害者、高齢者など、たくさんの方が通院、通所され、また、施設へ入所、病院へ入院されています。

LGBTQの問題は、ご本人だけでなく、ご家族にも関わるお話です。入院時の身元保証人や、病状説明など、様々なことが親族に限定されているのが社会の実情です。

本年10月から毛呂山町ではパートナーシップ宣誓制度がスタートし、丸木記念福祉医療センターや薫風園でも制度について説明を受けました。

この制度がスタートしたことによって私たちの日ごろの業務への気付きとなりました。

これを機会に、私たち医療機関や介護施設も、ご本人、その家族の意思を尊重し、配慮した柔軟な対応ができるよう今まで以上に、寄り添う相談・支援ができればと考えます。

当事者が受診しやすい、また、当事者であるご家族が相談しやすい医



療機関・介護施設となり、それが当たり前の世の中になるように日ごろから心がけたいと思います。

また、当センターには、医師、看護師、ケアワーカー、事務、施設管理をする人など様々な職種の人が大勢働いています。働いている仲間にも当事者は存在するはずで、職員が皆、仕事しやすい環境を整えることも大切だと思います。

一機関の小さな活動かもしれませんが、この活動が、町内の様々な機関で始まり、多様性を尊重した優しい毛呂山町になることに繋がっていくことを祈っています。

多様性を尊重した、寄り添った支援へ向けて

社会福祉法人埼玉医療福祉会 薫風園 事務長 末田 譲さん すえだ じょう



アライ Allyになろう

～ありのままを受け入れたい～

Allyとは、英語の「Alliance（支援）」が語源となっており、多様な性のあり方を理解し、支援することです。一人ひとりが性のあり方は多様であることを「当たり前」と認識し、互いに尊重して生活することで、社会全体での理解へとつながっていきます。また、多様性を象徴する「虹色」をあしらったグッズを身につけることで、周囲に多様な性のあり方への理解があることを表現することができます。

誰もがありのままの自分でいられる社会となるよう、Allyの輪を広げていきましょう。



ある絵本のお話です。

ママが二人のおうちなので、子どもがいじわるなことを言われました。二人のママは「あの人は分からないから怖い」と言いました。知ることは必要で、大切なことです。「ありのままの自分」が受け入れられれば誰もが安心して暮らせる社会になるのではないのでしょうか。

私たちは、知って、理解した、多様性の応援者です。



毛呂山町男女共同参画推進委員

私たちが子どもの

ころ、ランドセルは黒と赤、違う色を持つ子は「変わった子」でした。今の小学生のランドセルは青、薄紫、ピンク、茶色・・・とカラフルです。カラフルなランドセルは、好きな色と個性です。多様性はランドセルの色と一緒にと思っています。



毛呂山町役場職員